

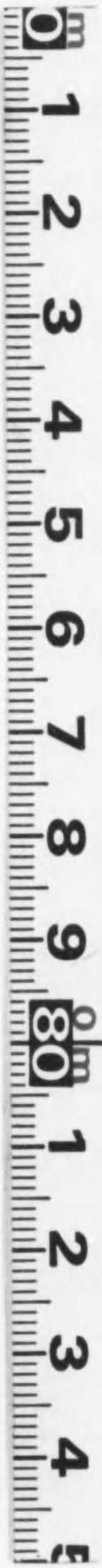
鹽竈神社の鹽竈宮様

特257

38

683

34



始



特 25
68



臨江社の監査記録





鹽竈神社の御神徳



はしがき

當神社境内の鹽竈櫻は、他所に在る所謂鹽竈櫻と異り、名にし負ふ鹽竈神社の鹽竈櫻は、櫻品中稀なる一品種にして、今回天然紀念物に『鹽竈神社の鹽竈櫻』と指定せられたるは此所以なり。當神社が此花を社紋としてゐることも、斯るゆかりによるものなり。

この鹽竈櫻に関する文献は非常に多く、鹽竈神社の御神徳の高さが如く廣く世に知られたり。彼の大町桂月が海内たゞ一本の珍木なりと賞揚し、屋代弘賢が眞の名品なりと絶讃せるも誇張にはあらざるなり。

昨年五月はじめ、櫻花満開の時、本邦櫻研究の權威者理學博士三好學氏は、實地に調査して文献上の鹽竈櫻と全く合致する貴重なる一品種なりと鑑定せられたり。

しかして本年紀元節の前日、天然記念物に指定せられて、輝かしく世に現はるることゝなれるは、名品をして愈々その眞價を高めしむるものといふべく、また記念すべき皇紀二千六百年に當り、一段と敷島の大和心の男々しく叫ばるゝ時、この逸品を廣く紹介することを得たるは、洵に意義深きをおぼゆるなり。花にして心あらば、ひとしほ氣高く咲き匂ふことなるべし。

今度の指定を受くるまでには、宮城縣史蹟名勝天然記念物調査委員京道信次郎氏の數年に亘る調査研究と、絶えざる熱意とによる所多く、本書も亦同氏の執筆にかゝるものにして、其の勞に對し謝意を表する次第なり。

皇紀二千六百年

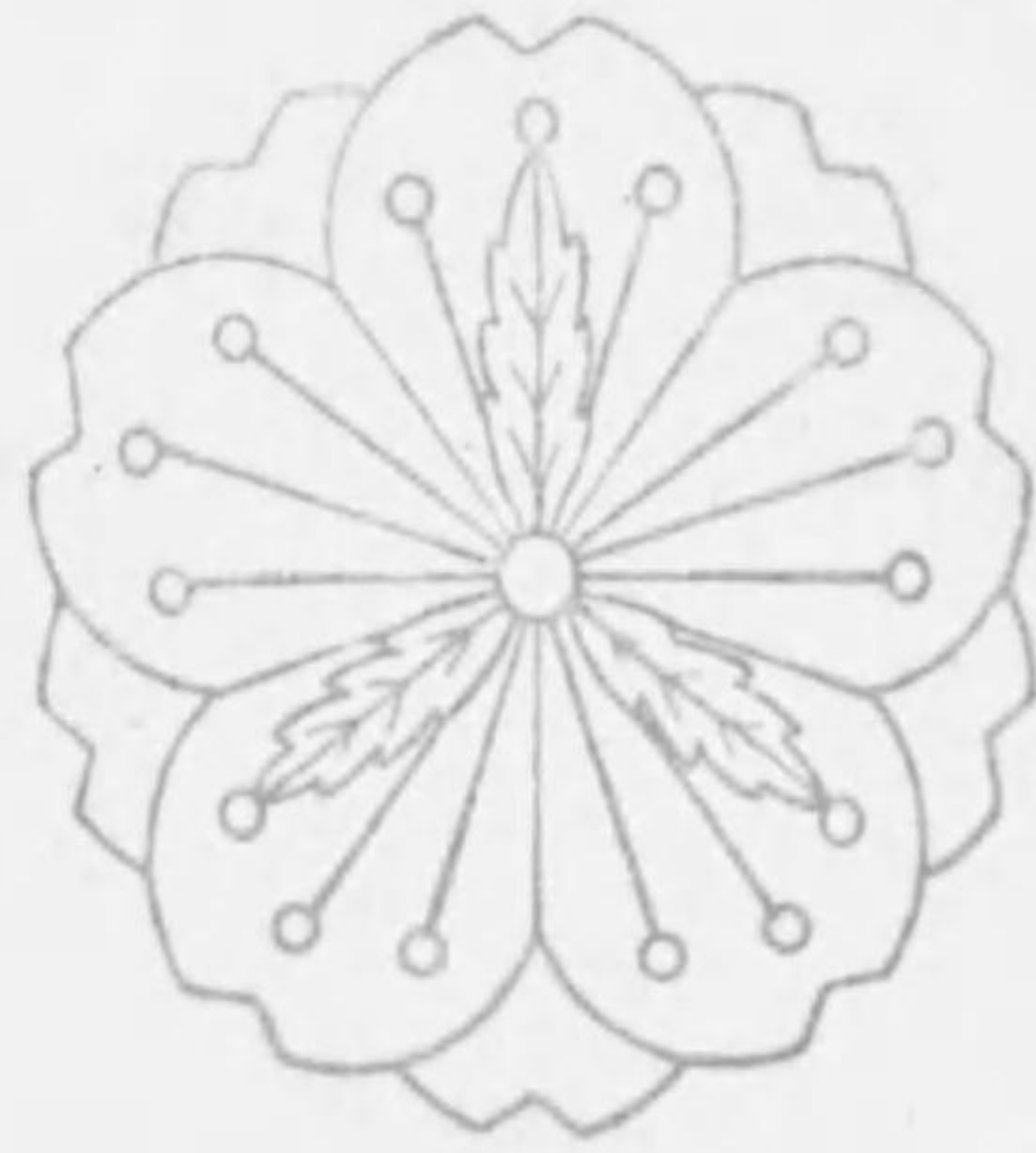
神武天皇祭の佳日あるす

國幣中社

志波彦神社
鹽竈神社

宮司

佐藤重三郎



社 紋

(鹽 竈 櫻)

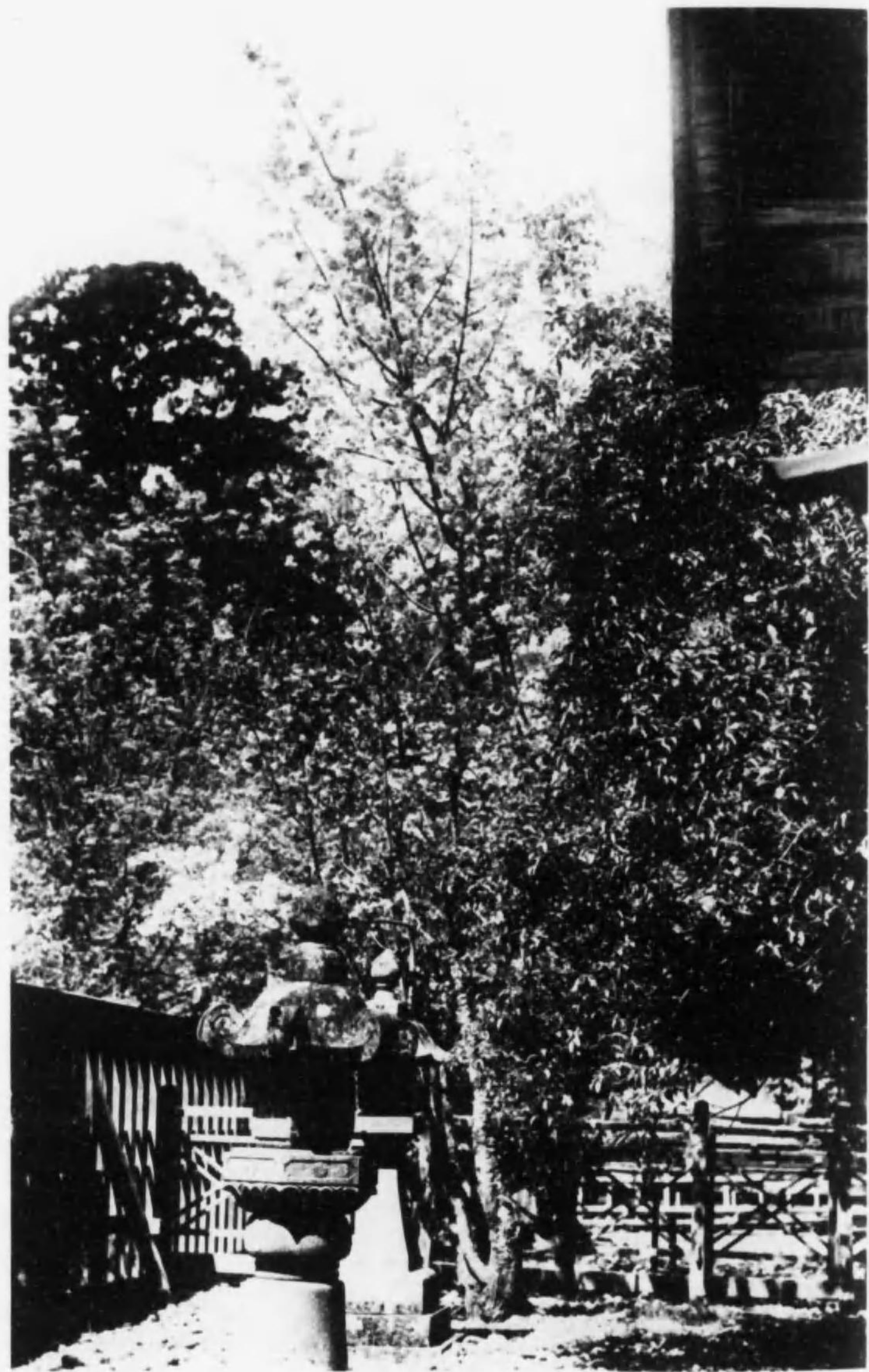


道 參 表

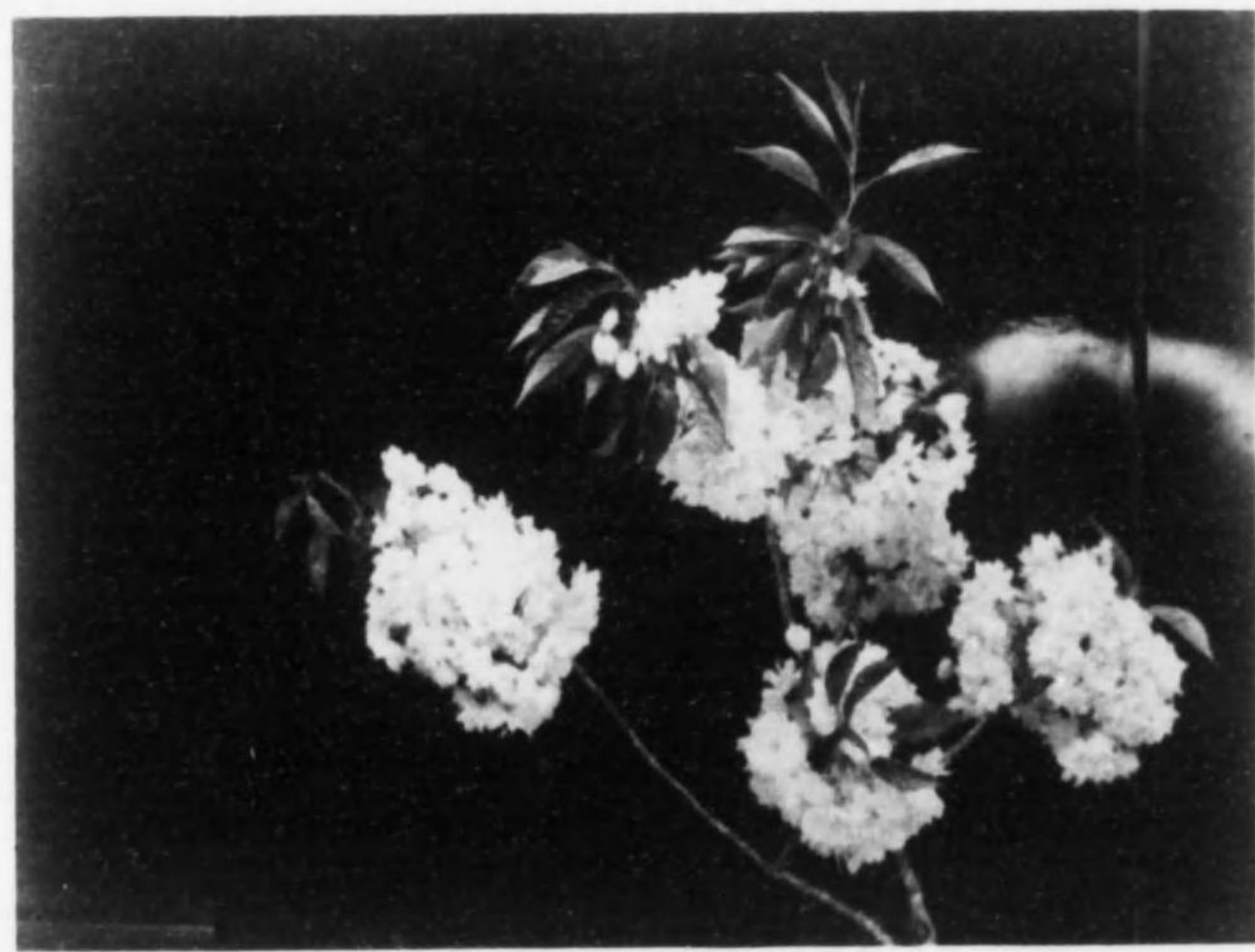


五 妹

(慶 源 野)



景全「櫻竈鹽の社神竈鹽」物念紀然天



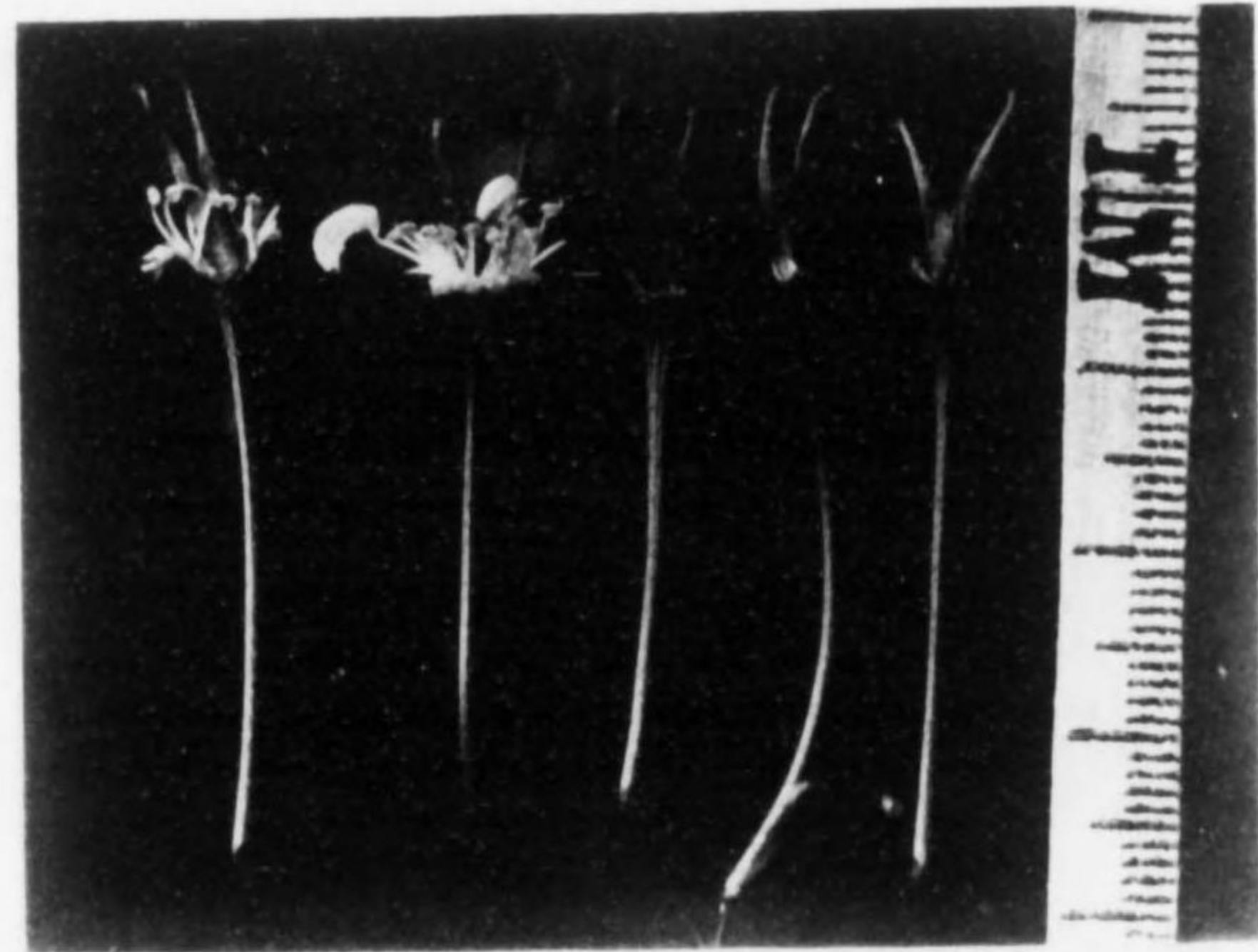
枝一るせ開滿てりく



櫻窠鹽の開滿



(大物實) 花の櫻籜鹽



(大物實) 葉小の中の花



(在存迄頃年十正大) 櫻 籠 鹽 木 老

鹿門先生清鑒

鹽竈櫻

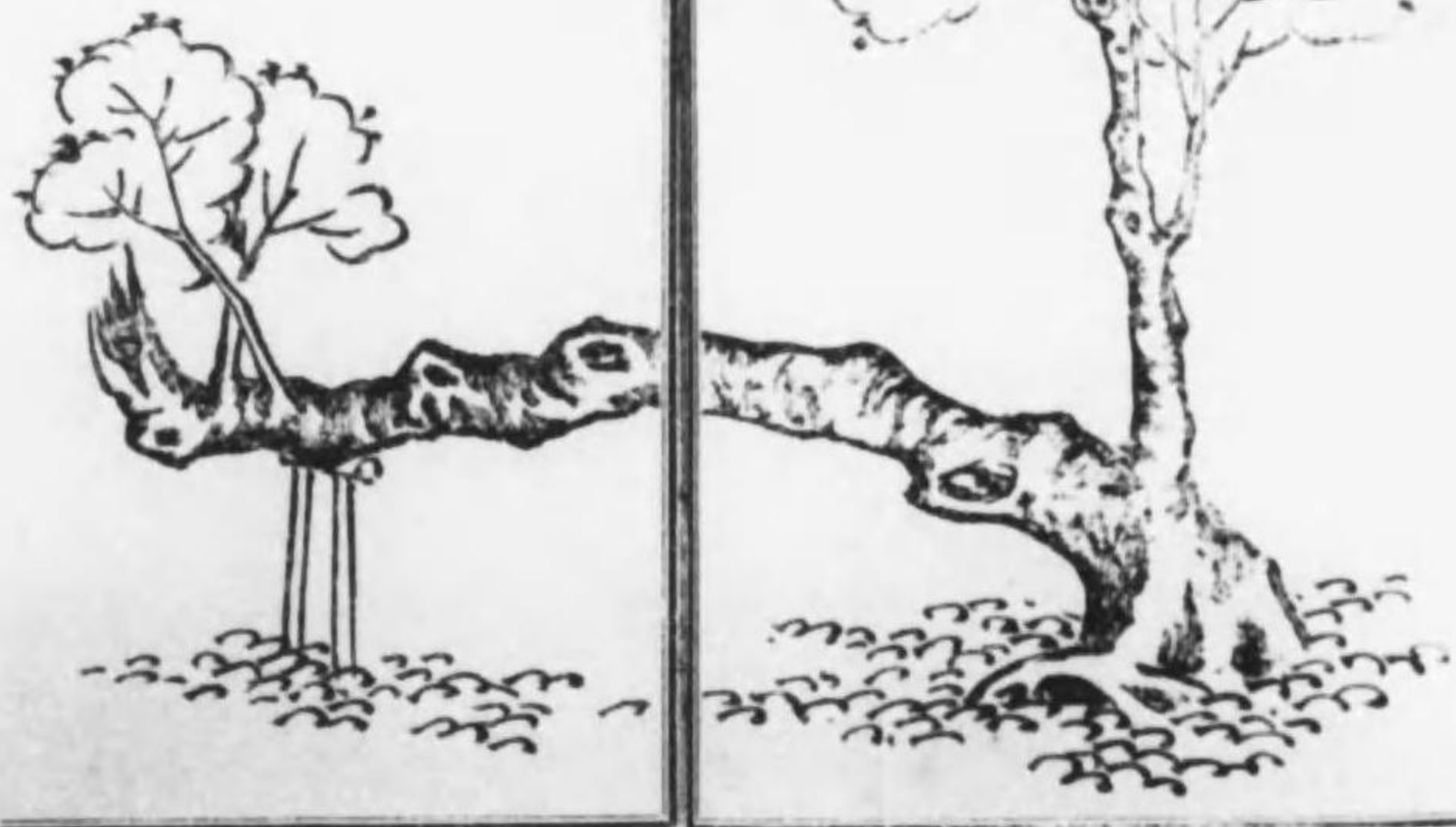
弟岸吟香敬題



岸吟香曰鹽釜櫻為世所珍而不
載及者何也圖所臆以示乃刊卷
首以補櫻在右宮側老幹屈盤為
數百年物重粹淡紅穠艷倍常種花
李稍晚
齋壬辰春盡日



張門道人於硯齋

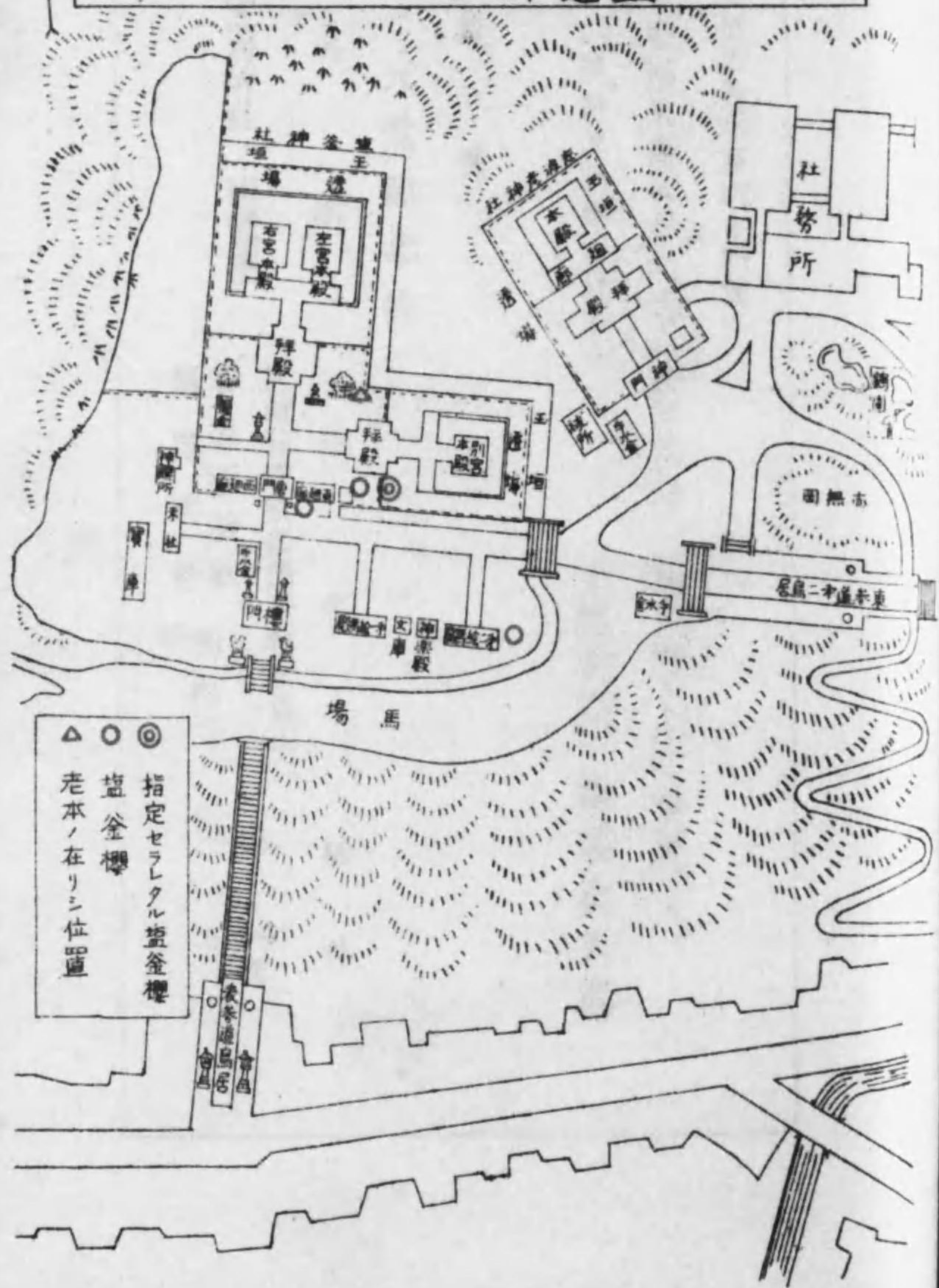


吟香用鉛
筆寫所記
兩村為之
瑣墨

「概勝松鹽」著切千岡 獻文の櫻竈鹽

北

志波彦神社
 鹽竈神社
 國幣中社
 境內鹽竈櫻位置



◎ 指定セラレタル鹽釜櫻
 ○ 鹽釜櫻
 △ 老本ノ在リシ位置

鹽竈神社ノ鹽竈櫻



文部省告示第六十四號

史蹟名勝天然紀念物保存法第一條ニ依リ左ノ通指定ス

昭和十五年二月十日

文部大臣 松浦鎮次郎

第一類

天然紀念物

名稱	地名	物件
鹽竈神社ノ鹽竈櫻	宮城縣宮城郡鹽釜町一森山	櫻 一株
鹽竈神社	志波彦神社 境内	

鹽竈神社の鹽竈櫻

所在地

宮城縣宮城郡鹽釜町一森山 國幣中社

志波彦神社
鹽竈神社 境内

現 狀

鹽竈神社別宮玉垣内の南隅にあり、地際の幹圍一・六米、地上直に
二大幹となり、西幹は地上〇・七米にて枯死し切株のみを存す。東
幹は樹勢旺盛にして分岐點にての幹圍〇・六米、地上一・五米にて
大小二枝に分れ、大なる方四八糎小なる方二四糎、樹高九米あり、
樹皮上には數多の地衣類生じて一種の趣を加ふ。

特 徴

二

(一)花の着き方 花軸甚だ短く、各花は密に群りて着生し、その状櫻の一品種なる「虎の尾」に似たり。

(二)花梗 長さ四種、無毛平滑、始め淡紅色後綠色を増す。各花は稍垂下す。

(三)萼 萼筒部の長さ〇・二種、淡紅色、萼片との間に縊れ目なし、萼片の長さ〇・七種。

(四)花瓣 (イ)色 淡々紅色、(ロ)花径 三・五乃至四種、(ハ)瓣 重瓣六又は七重即重ね厚く約一種あり、(ニ)瓣の數 少きものにて三十五枚多きは五十一枚、(ホ)瓣の形 縦に皺あり先端に二乃至五の微凹あ

りて鋸齒状のもの多し、(ヘ)雄蕊 少數、多くは不完全、花絲の長さ

〇・五種、(ト)雌蕊 二枚の綠色小葉に變ず、長さ一種縁に微鋸齒あり、中肋にて折れ、二小葉は抱合す、基部の幅二種あり。

(五)嫩葉 淡紅色にして美麗、花と同時に開展す。故に花の美を一層艶麗ならしむ。

(六)花期 晩く、吉野櫻より約十日程後る。例年五月初旬満開す。

之を要するに鹽竈櫻の特徴は花にあり、普通の櫻より花期晩く、花密生して一品種「虎の尾」に似、八重咲にて重ね厚く、瓣數多きは五十一枚に及び、瓣に縦の皺ありて先端に二乃至五の微凹あり鋸齒状を呈し、雌蕊は二枚の綠色小葉に變化せる等にあり。

三

「鹽竈」と云ふ櫻との區別

京都平野神社其他數ヶ所にて鹽竈と稱する櫻あれども、何れも單辨にして當神社の鹽竈櫻とは大いに異れり。今回天然紀念物の指定に當り「鹽竈神社ノ鹽竈櫻」と命名せられたる所以はこれとの混同を避くる爲なり。

由 來

鹽竈神社境内に栽植せられたる鹽竈櫻の由來に關する文献は一も無く、これを知るに由無けれど、文献上に鹽竈櫻の名の現はれたるは畏れ多くも八百餘年前 堀河天皇の御製に拜するを始とし、二百有餘年前には種々の書に其の名出で、寫生圖等の記載をも見るに至れ

り。「櫻品」によれば名の起源は花の美しきのみならず葉まで、即ち葉まで（濱で）見ると云ふ心にて鹽竈と名けたりと。

老木鹽竈櫻

鹽竈神社左宮と別宮との中間にありしと云ふ老木鹽竈櫻は、岡千仞著「鹽松勝概」上の巻首に寫生圖と略説とあり、又大槻博士著「大言海」「さくら」の項には老木鹽竈櫻を記述し「高さ三間蟠蚪五間、太さ四尺二寸」云々とあり。此の老木は大正十年頃まで枯木として存在したりと云ふも今は無し。（圖版参照）

境内の鹽竈櫻

神社境内に前記天然紀念物に指定せられたるもの、外に尙若樹三株

あり、一は別宮西南隅玉垣外にありて幹圍四五種、二は唐門前にありて幹圍六八種、三は繪馬殿東方の崖上にありて太さ略々二に等し。

文 献

○堀河天皇御製（昭和八年大槻文彦著「大言海」所載）

あけくれにさそな愛て見む鹽竈の

櫻の本に海人のかくれや

○後水尾院御製（文化二年谷川士清纂「倭訓栞」所載）

浦の名ときこえは遠き陸奥の

花は軒端にちかの鹽かま

○好色一代女 卷三（貞享三年井原西鶴作）

一年松島に行きて（中略）鹽竈の櫻も見ずに云々

○大和本草綱目 十二之上（貝原益軒著）

鹽ガマと云フ遅櫻アリ ハマデ見事ナリト云フ意ナルベシ

○和漢三才圖繪 卷八七（正徳三年寺島良安著）

鹽竈 白、千葉帯淡色 嫩葉微黄絞り色而葉亦艶美ナリ

○増補地錦抄 卷三（享保四年伊兵衛作）

櫻のるひ

しほがま 色ありせんやう大りん

成ほとくゝりてさがる

○淨瑠璃 井筒業平河内通（享保年間近松門左衛門作）

彼岸櫻の雪と散れ 煙となれや鹽釜櫻

○淨瑠璃 關八州繫馬（享保年間近松門左衛門作）

しほがまさぐらの瀧櫻

○花壇綱目 卷下（享保元年水野元勝著）

櫻珍花異名の事（四十種をあぐ）

鹽がま 中輪なり

○恬顔齋櫻品（松岡玄達著）

鹽釜櫻の寫生圖を掲げその下に次の説明あり

重瓣にて花と葉と雜りて出るなり、小輪にして花形しほみたるが

ごとし、花瓣に皺ある故しほみたるやう見ゆ、牡丹の遠山と云ふものに同、花少し垂るゝなり、葉は小さし、はまでよきと云ふ義にて號く

○花 鑑（寶曆三年小野蘭山著）

おそく咲き葉まで見るべき鹽釜は

しはうちよする八重の小輪

○花 錦（寶曆四年小野蘭山著）

しほめる花の 五つむつ 垂れつゝ 葉は ふたつみつ 青芽ま
じれる 普賢こそ 陸奥國なる 南殿ぞよ（中略）はまで見るべき
しほがまは しはうちよれる 花にこそ

○奥州名所圖繪 (大場雄淵著)

鹽竈櫻

別宮瑞籬の内東隅にあり花の輪大きく色淡薄にして花重葎なり殆
東海の一珍花なり

○草木奇品家雅見 卷下 (文政十年青山種樹家金太撰輯)

梅櫻番附中に「まほかま」の名出づ

○剪花翁傳 (嘉永四年水竹亭中山雄平編)

鹽釜櫻 花八重 開花上巳後

○古今要覽稿 卷第二八 (文政天保中屋代弘賢等編)

種類云鹽竈櫻大輪の八重にして白花蒼微紅暈かさねあつく花瓣に

しはありて花多くつく葉に黄葉をまじへて美なるものなり陸奥の
一宮鹽竈明神の祠下に古樹あり眞の名品なり今毬櫻といふもの此
種に似たり

○奥鹽地名集 (嘉永七年二月七十七叟信德鹽竈勤仕中寫)

神社内樹木數々鹽竈櫻名木なり つなぎの梅しだれ櫻しだれ栗其
の外珍木多し

○鹽松勝概 上卷 (明治二十五年岡千仞著)

岸吟香日鹽竈櫻爲世所珍而不載及者何也圖所臆次示乃刊卷首以補
櫻在右宮側老幹屈盤爲數百年物重瓣淡紅穠艷倍常種花季稍晚鹿門
道人於硯癖齋

壬辰春盡日

(寫生圖を掲ぐ・圖版參照)

○仙鹽遊覽案内 (明治四十年今井恒見著)

別宮の右側に有名なる鹽竈櫻あり、恰も龍の蟠るか如く、花瓣に青葉を挿み、七重八重佳麗にして花も大きく、通例の櫻より十五日遅れて開く (別宮の玉垣中にも若き一株あり)

○日本百科大辭典 第四卷 (明治四十三年三省堂編)

鹽竈櫻の繪圖あり

○松島大觀 (大正二年山下重著)

老櫻が枯木となつて存在せる寫眞を載せ

一老櫻あり地に蜿して枯立す苔鮮之を蔽ふ此花重瓣なりしよし此

種の櫻を稱して鹽竈と云ふはこれに基く

○山水めぐり (大正八年大町桂月著)

上野公園の新緑に送られて來て鹽竈神社に詣づれば祠側の鹽竈櫻笑つて我を迎ふ、一株の老櫻倒れんとしてまた起つ、八重の瓣内に葉を出すこと他に比類なく海内たゞ一本の珍木なりともてはやさるゝものなり

右の外左記書中に鹽木櫻に関する記載あり。

○大日本國語辭典 第三卷 (大正十年上田萬年、松井簡治共著)

○日本文言泉 (大正十一年落合直文著芳賀矢一改修)

○宮城郡誌 (昭和三年宮城郡教育會編)

398
484

○近松語彙（昭和五年上田萬年樋口房千代共撰）

○古事類苑 五八（昭和七年神宮司廳編）

○大言海 卷二（昭和八年大槻文彦著）

○宮城縣史蹟名勝天然紀念物調查報告 第八輯（昭和八年宮城縣史蹟名勝天然紀念物調查會）

昭和十五年四月二十五日印刷
昭和十五年五月一日發行

〔非賣品〕

發行所 宮城縣鹽釜町一森山 國幣中社 本報社務所

右代表者 佐藤重三郎

宮城縣鹽釜町字尾島三番地

印刷者 大正活版印刷所

山本健三

終

